SNS 連動企画第 1 弾「リレー投稿」　2020 年 5 月度テーマ『見直す』第 2 回

見直す～日々を紡ぐ

2S61 卒　青山(旧姓　野口)　潤子

　コロナ禍による自粛生活も間もなく 2 ヶ月になる。
不要不急の外出は控え、仕事も電話当番の日以外、自宅からネットワークで会社につなぎ、テレワークでの勤務が常態となっている。通勤に片道 1 時間 15 分ほどかかっているので、単純計算でも 1 日往復 2 時間半ほど在宅勤務の日は、時間が浮くはずだったのだが、はて？！起床時間、終身時間にほぼ変化はほぼなく、電車に乗らず、決められた仕事をこなし、外食をせず、基本、家族とだけ直接話す暮らし。
　様変わりをした今のわたしの日常について少し書いてみたい。

　「昔観た映画や本を再び味わう」
　世の中の皆さんもきっと身を切るような苦労をされ、さまざま工夫をこらしていると拝察するが、いったいどのように日々を暮らしているのか、機会があったらぜひ訊いてみたいものだが、私は自由になる時間に、若い頃に観た映画や、読んだ本を改めて観たり、読み直したりしている。
　最初に思い浮かんだのが、映画『砂の器』と原作の小説。1974 年松竹製作の長編映画であり、あまりに原作が名作過ぎて、昭和、平成を通して映画以外に 7 度もドラマ化されている松本清張の代表作。すでに 4－5 回は観ていて、つい最近原作も読み直したが、やはり本当に好きだ。どこが良いかと言われると、特に、主人公の父親役の加藤嘉が良いと答えたくなる。この人の存在感に圧倒され、画面に登場してくるだけで、鼻の奥がツンとして、のど元奥と、目頭が熱くなる。そして子役の澄んだ瞳がまた良い。この映画のテーマ曲となる『宿命』という芥川也寸志作曲のピアノコンチェルトが、厳冬の中、冬の能登の浜辺を彷徨する父と子の様子に重なり流れるシーンは圧巻で、吹きすさぶ風雪が親子の人生の行く手をさえぎるように、容赦なく二人に降りかかる。見ていて体が冷えていくようだ。
　最初に見たとき、おそらく中学生だったと思うが、殺人事件をテーマにしたサスペンス映画としか考えなかったわたしも、50 年以上の人生を生きてみると、なんとも襞の多い丹念に練り上げられた作品であるのがわかる。いつしか自分にとって大切な 1 本となっていることに気づいた。長く生きると、良きにつけ悪しきにつけ、物事をとらえなおす機会を何度か与えられるものだとつくづく感じる。

　「NHK のラジオを聴いてみる」
　聞き逃した番組をあとから音声データで聴くことができるサービスについて、以前から知ってはいたが、車で出掛ける道すがら、たまに音楽番組を聴く以外にあまりラジオを聴く習慣はなかった。しかしこの時期、テレビ番組はどのチャンネルもコロナ報道で、ワイドショーが繰り返す芸能人と政治家のバッシングコメント報道ばかりに辟易していたので、昔の番組のアーカイブを扱うラジオのサービスに癒しを求めたのかもしれない。

家事の傍らラジオ番組を流しっぱなしにするのだが、わたしがはまったのは、著名な研究者の講演会やシリーズ企画の歴史の講義などだ。今話題の日本を代表する作曲家の古関裕而のインタビューのアーカイブには、とても感銘を受けたし、心理学者の加藤諦三の 4 回シリーズの講演には、目から鱗が何枚も落ちた。万葉集研究者の上野誠の抱腹絶倒かつ奥深い万葉講義には、思わずノートをとってしまい、参考文献を数冊購入してしまった。スマートフォンで聴くインターネットラジオは、まさに宝物のような小箱ではないか！得がたい人生の友を得た気持ちになった。日々耳から福を得ている。

「手紙やはがきを書くことを再発見したこと」
まだコロナ感染者が関東エリアでさほど増える前の 2 月末、ちょうど北海道で緊急事態宣言が出た頃、認知症の母を看護していた父が体調を崩して入院したので、小樽へ帰り、実家で独居となった母の世話をした。幸い父の入院が長引かなかったため、1 週間で自宅に戻ってきたが、そのあと再び小樽に行くことは今も難しい。進行性のレビー小体認知症の母には、電話もするが、もっぱら短いメッセージを私の息子たちにも書いてもらって絵はがきを送ることにしている。
また、近しい友人が末期がんで、千葉県の家族のもとを離れて関西の専門病院に入院中だが、行きたくても未だ見舞いもかなわない状況だ。でもまったくやれることがないわけでもない。直接的に会話することは、短時間なら数名での Web 会議アプリで可能だし、チャットなどを通じてタイムラグなくおしゃべりするようにやりとりもできる。
しかし病気と闘う彼女の負担を考えると、触れて安らげる見舞いの品を選び手紙やカードを添えて送るのもやれることのひとつと考えるようになった。ベッドにいるときに足元をあたためるソックスを編んだり、次の夏に一緒におでかけしょうと彼女好みの糸でバックを作り送ったり、時間のあるときにしかできない贈り物を準備できるのは、今の暮らしの醍醐味だといえるだろう。胸の想いを文字にして、丁寧に言葉を選び、書きつづり、相手に届けることを大事に続けている。

私たちは、数ヶ月前には、このような日常を暮らすことを想像さえしなかったが、失われた貴重な多くの命、時間、仕事や平穏。メンタリティや生き方そのものにも大きな影を落とすコロナの厄災とこれからともに生きていかざるを得ない時代にあって、自分の足元、内面を見直すこと、正直に自分と向き合い、つぶさに見て、考えそして直すところは直す。それが、今やれることではと思うのだ。

まだまだ先の見通しは立たない状況ではあるが、この小さな文章を書きながら、やっぱり自分に言いたい。「選んだ道が一番いい道」と信じられるように生きようと。夜中の PC の前で、独りそうつぶやいている。